

【書評】 高橋義彦著『カール・クラウスと危機の オーストリア——世紀末・世界大戦・ファシズム』を読む ——世紀転換期ウィーンにおける「批判的モダニズム」——

速 水 淑 子

I

本書は、二十世紀初頭ドイツ語圏において「知的土台のひとつ」(7頁)であったカール・クラウス(1874-1938)について、その多面的な思想を、文化史、思想史、政治史の観点から読み解くものである¹。クラウスは、922号に及ぶ個人誌『ファッケル』と、700回にわたる独演会を通じて、おびただしい評論、風刺作品、詩、戯曲を発表した。彼の影響が指摘される同時代人のリストには、ベンヤミン、アドルノ、シェーンベルク、カネッティ、ウィトゲンシュタイン等、錚々たる名前が並ぶ。一方で、その影響力の由来はしばしば定かではなく、彼の思想世界の全体を描く試みはいまだ少ない。蓋しそれは、ひとつにはクラウスのテキストの難解さに、またひとつには「リベラリスト〔…〕、王朝主義者〔…〕、社会民主主義者〔…〕、ファシスト〔…〕」(208頁)と変遷したその政治的立場の捉え難さに起因しよう。

本書はこの難題に対し、文化史的政治史的背景の緻密な再構成を通じて接近し、一見矛盾にみちたクラウスの思想から、「メディアを通じて流通する言葉の虚偽性」(14頁)批判と「オーストリア・パトリオティズム」(14頁)という、二つの一貫した論理を掘り出してみせた。

ショースキーが『世紀末ウィーン』²で描き出したのは、「政治的・公的な場から追われたリベラル派市民層が、その心理的よりどころを貴族的で

唯美的な文化に求めた」(9頁) 結果として生まれた、非政治的なモダニズムであった。これに対して著者が注目するのは、同じショースキーが『歴史と共に考える』³で言及する、世紀末ウィーンの啓蒙的・批判的文化、すなわち「一九世紀のリベラル派市民層の精神的後継者として啓蒙主義的伝統の立場から、大衆運動や唯美主義者に対抗した知識人」(9頁) の存在である。本書の重要な貢献のひとつは、世紀転換期ウィーンにおけるこの「啓蒙的・批判的モダニズム」の中心的人物の一人としてクラウスを位置づけ、さらに「啓蒙的・批判的モダニズム」内部におけるクラウスの独自性を、彼の思想の根底にある保守性ないし反進歩主義に求めたことである。

第一章「世紀転換期ウィーンにおける『装飾』批判とその意味」および第二章「フリッツ・ヴィッテルスと『二人の精神的父親』」では、建築家アドルフ・ロースおよび精神分析学者ジークムント・フロイトとクラウスの交流を分析することで、「批判的モダニズム」内部におけるクラウスの独自性が強調される。

1909年、ロースはミヒャエラー・プラッツに紳士服店のための建物を設計したが、その無装飾性が真向かいにある宮廷への不敬にあたるとの批判を受け、翌年から1912年に認可されるまで、市当局から工事中止を命ぜられる事態に陥っていた。この「ロース・ハウス」スキャンダルにおいて、クラウスはロースを擁護し、ともに「装飾」批判を展開した。著者は、両者の議論における「装飾」「進歩」「衝動」の関係を比較することで、二人の装飾批判の相違点を炙り出す。すなわち、ロースが「装飾」を、文化的後進性の象徴とされる入れ墨を例に、「エロティックな衝動」の露出とみなして否定し、衝動の抑制たる無装飾を「進歩」として称揚したのに対して、クラウスは「装飾」という語を「常套句」と等置し、常套句を駆使して市民的な性道徳を押し付ける近代マスメディアのイデオロギー性を批判したという。こうして本書では、「クラウスの装飾批判は、ロースのような進歩主義的方向ではなく、むしろマスメディア、マスコミュニケーション・テクノロジーを生み出した西洋近代、進歩そのものへの批判へと向か

う」(41頁)と、進歩主義者ロースと進歩批判者クラウスが鮮やかに対比される。

著者はさらに、クラウスの市民的性道徳への批判が、女性の性的解放の訴えや人種差別批判にも結び付いていることを示し、それら一連の「白人＝男性＝市民社会」(46頁)批判が、「人間から『自然』を奪う」(42頁)ことへの危機感に由来していると指摘する。こうしたクラウスの立場は、フロイトとの比較を通じてさらに明確化される。両者はともに旧弊な市民的性道徳を批判した点で共通しているが、フロイトが神経質症を発症させない形で本能的衝動を抑制することを目指したのに対して、クラウスは本能的衝動の解放を目指したのである(72-3、88頁)。自然的衝動の昇華を目指すフロイトの立場は、ロースの装飾批判にも通じるものであった。著者は、自然的衝動の抑制を主張することで最終的に市民社会的価値を優先させたフロイトおよびロースに対して、クラウスが「自然」により近い存在としての「有色人種」および「女性」の立場から、市民社会的道徳の欺瞞性を批判した点を評価する(46頁)。

第三章「メディア批判とテクノロマン主義批判」では、クラウスの第一次大戦批判が、上記のような1910年代の文化ペシミズム的な進歩批判の延長に位置づけられる。著者は『ファッケル』掲載記事と第一次大戦後に刊行された『人類最後の日々』の詳細な分析を通じて、クラウスの近代的テクノロジーに対する懐疑が、毒ガスや戦闘機といった大量破壊兵器への批判、産業界の戦時利得の暴露、銃後のナショナリズムを煽動するマスメディアへの批判に結びついていることをあきらかにする。章題に採られた「テクノロマン主義」は、新しい技術を用いた残虐な戦争が「英雄」や「名誉」といったロマン主義的常套句によって飾り立てられる事態を指すクラウスの造語である。この概念は、第五章「ナチズムとオーストロ・ファシズム」において、クラウスのナチズム批判言説を分析する際にも用いられる。第一次大戦期のクラウスにはこれまで、一方では王室や貴族を擁護する保守として、他方では反戦を訴える革新として、相反する像が与えられ

てきた。それに対して本書は、進歩批判という保守的立脚点から反戦を訴えるクラウスの言説を丹念に追うことで、のちのナチス批判にまでつながっていく、クラウスの啓蒙的・批判的な志向性を見出すことに成功している。

本書のもうひとつの大きな貢献は、世紀転換期のオーストリアに、フリードリヒ・ナウマンの理念を受け入れ独逸同盟の深化を目指す「ドイツ・ナショナル中欧派」とハプスブルク帝国の独自性を強調しプロイセンに対抗する「オーストリア的中欧派」の対立が存在したことを指摘したうえで、クラウスを後者に位置づけ、さらに後者内部におけるクラウスの特殊性をあきらかにしたことである。

第四章『「オーストリア的中欧」理念と第一次世界大戦』では、保守派でありつつ反戦を訴えた政治家ハインリヒ・ラマシュの思想と、それを支持するクラウスのラマシュ論が、当時の政治状況に照らして詳細に分析される。ラマシュおよびクラウスは、ドイツとの関係強化と勝利の講和を目指して戦争継続を訴える「ドイツ・ナショナル中欧派」を批判し、早期単独講和と軍縮、そして国際的仲裁機関の設立を訴えた。その主張を支えたのは、著者によれば、「ハプスブルク帝国の多民族性、王朝への忠誠、カトリック信仰」(137頁)を核にドイツとは異なる政治文化を求める「オーストリア・パトリオティズム」であった。著者はまた、「オーストリア的中欧」理念はハプスブルク帝国内で優位に立つドイツ系住民の既得権益を追認する論理としても機能し得たなかで、ラマシュおよびクラウスが、帝国内部の非ドイツ系住民にも同等の権利を与えるよう訴えた点に注目する。こうして著者は、オーストリアにおけるドイツとは異なる政治文化の特徴——特に第一次大戦に反対し、国際連盟設立を訴え、帝国内での諸民族の共存を目指すような、独自の保守思想が存在したことを示す。

第五章「ナチズムとオーストロ・ファシズム」では、第一次大戦期の反戦からドルフス支持へという一見錯綜したクラウスの政治的言説の展開

速水 【書評】 高橋義彦著『カール・クラウスと危機のオーストリア——世紀末・世界大戦・ファシズム』を読む
——世紀転換期ウィーンにおける「批判的モダニズム」——

が、この「オーストリア・パトリオティズム」において一貫していることが指摘される。著者は、『第三のワルプルギスの夜』（1933執筆）および「なぜ『ファッケル』は刊行されないか』（1934）を手掛かりに、オーストリアをナチスの脅威から防衛するための唯一の現実的選択肢として、クラウスがエンゲルベルト・ドルフスに期待した様子を辿って行く。

こうしたクラウスの思想世界の理解をふまえ、著者は第六章「言語批判としてのクラウス政治思想」および終章において、エリック・フェーゲリンのクラウス論を参照しつつ、クラウスの政治思想的意義を「イデオロギー言語批判」のなかに見出す。フェーゲリンは、ナチスの残虐行為の責任を文学やジャーナリズムにおけるドイツ語の乱れに求め、そのなかでクラウスが言葉にリアリティを取り戻そうと試みたことを評価した。フェーゲリンによればクラウスは、本来地上に実現し得ないユートピアを「第二のリアリティ」として描き出してしまうメディアの言葉の虚偽性と暴力性を、超越的理念としての「第一のリアリティ」を基準に批判した稀有な思想家である。著者はこのフェーゲリンのクラウス論に基本的に賛同しつつ、さらに、この「第一のリアリティ」なるものがクラウスにとって何を意味したのかを考察する。内実としてはそれは、古典的ヒューマニズムの掲げる「質的な人間性」や「突きつめられた個人主義」の理念、そしてクラウスが芸術作品の基盤だと考える「根源」ないし「自然」の領域であったという（231頁）。著者は一方で、クラウスの「第一のリアリティ」を構成する諸理念が、きわめて抽象的であり、政治体制における構成的原理とはなり得ないことを指摘する。そのうえでクラウスの政治思想的意義を、その啓蒙的批判的側面、すなわち「虚偽告発の思想」（237頁）のなかに見出している。

II

以上のように、本書はクラウスの思想世界に、基軸としての「啓蒙的・批判的モダニズム」と、それを擁護する盾としての「オーストリア・パトリオティズム」という一貫した論理を見出し、その全体像を描き出す。以下では、評者が本書に学びつつ感じたクラウスの思想にみられる課題と可能性について、三点ほど述べてみたい。

第一点目は、主に本書の一章および二章で論じられる、クラウスの「有色人種＝女性＝自然」（47頁）擁護にかかわる。著者は、「有色人種／白人」「女性／男性」「自然／理性」を二項対立的に捉えるクラウスの思考様式が、それ自体差別の構造を内包していることに注意を促す（47頁）。一方で著者は、クラウスが「自然」により近いとされる「有色人種」に対して、「野蛮」や「未開」ではなく、「知性」「信頼性」「善性」といった「人間精神の肯定的な意味」（48頁）を与え、むしろ「白人男性」を「電気に照らされた野蛮人」（49頁）とみなしている点に、二項対立の単なる逆転以上の意義を見出している。

ただしクラウスの二項対立的言説は、価値づけの逆転だけでは解決しえない、より深刻な問題を孕んでいるように思われる。アドルノとホルクハイマーは『啓蒙の弁証法』（1944）において、理性による自然支配が、（1）一人の人間の内部における自然的衝動の抑圧、（2）人間による人間以外の存在の支配、（3）社会的強者による弱者の支配という三つの平面で同時に生じることを指摘した。その際二人があきらかにしたのは、理性的主体による自己内部の自然的衝動の抑圧（1）が、女性やユダヤ人など社会的弱者を「自然」的とみなし、自らが抑圧した幸福を投影すると同時にそれを抑圧する（3）というメカニズムであった⁴。オデュッセウスの旅路において、ロートパゴイやセイレーンといった古い神話の怪物たちが、克服されるべき自然的諸力を意味すると同時に、労働なき生活や官能的陶醉による失われた幸福の誘惑をも意味していたように、ユダヤ人や女性は、

支配抑圧の対象であると同時に、幸福な自然という憧憬の対象でもあった。二人は次のように述べる。

ユダヤ人イメージは、全体主義的になった支配の激しい敵意をよびさ
まさずにはいない相貌を帯びている。たとえば権力なき幸福、労働な
き報酬、境界なき故郷、神話なき宗教等々。こういった相貌は支配者
からはタブー視される。なぜなら支配されている者たちは心ひそかに
それらを切望しているからだ。支配されている者たちが、自ら切望し
ている対象を憎悪の対象とするかぎりでのみ支配は存続することがで
きる。⁵

克服すべき後進的習慣（食人・獣姦）を持つ「危険な野蛮人」と、文明
人が失ってしまった素朴さ（官能性・感覚性・誠実さ）を保っている「高
貴な未開人」のイメージは、肯定・否定の価値においては正反対ではある
ものの、実際には表裏一体のものとして生まれ、ともに支配のメカニズム
に寄与してきた。

こうした点を鑑みると、クラウスが「有色人種」に知性や善性や信頼性
といった肯定的特徴を与えたことや、女性の性的欲望を自然的なものとし
て擁護したことも、やはり差別を作り出す言説構造の一部であったと考え
ざるをえない。一方で、女性、同性愛者、有色人種など、市民社会の外部
に位置づけられる人々に、「追放された自然の諸力（verstoßene[]
Naturmächte）」（46頁）を見出し、その諸力に対して市民社会が抱く恐れ
と羨望を指摘するとき、クラウスは、『啓蒙の弁証法』の前提となる認識、
すなわち、自己の外部に自らの欲望を投影し、それを抑圧するという道徳
／差別の仕組みをあきらかにしている。この点にこそ、クラウスの思想が
その後の批判理論に与えた意義が見出せるように思われる。

第二点目は、クラウス、ロース、フロイトらに代表されるウィーンの「批
判的モダニズム」と、世紀末ウィーンの代名詞ともいえる「唯美的モダニ
ズム」の関係についてである。著者はショースキーを参照しつつ、1848

年革命の挫折にもかかわらず「政治面での議会主義化、経済面での自由化、文化面での首都改造（リングシュトラセ建築）」（8頁）において一定の成果を挙げていたリベラルな市民層が、旧来の支配層である貴族と勃興する大衆の間で次第に影響力を失い、美的世界に逃避した結果として生まれたのが、グスタフ・クリムト、グスタフ・マラー、アルトゥル・シュニッツラー、ヨーゼフ・ホフマンらに代表される世紀末の「唯美的モダニズム」であったと論じる。本書の貢献は、この非政治的かつ享樂的な「『逃避』の文化」（1頁）に対して、消え去りつつあるリベラル派市民層の啓蒙的文化を受け継ぎ、ハプスブルク帝国を取り巻く様々な危機に正面から取り組んだ「批判的ウィーンモデルネ」（1、2、6頁他）の様相を、クラウスを中心に描き出した点にあった。

本書を通じて評者が感じたのは、一九世紀のリベラルな市民文化、世紀転換期の唯美的文化、そしてそれに対抗して存在したとされる啓蒙的批判的文化の三者が織りなす関係の複雑さである。たとえば、近代化ないし進歩に対抗する拠り所として「女性・自然・エロス」を称揚するクラウスの立場は、この点だけを見れば、自然のモチーフや女性のエロスや有機的形態を取り入れた唯美主義的モダニズム（たとえばクリムト、オルブリッヒ）と、むしろ近しく感じられる。

また、リベラルな市民的啓蒙文化の精神的後継者とされるロースは、まさにその市民的啓蒙文化の所産とされるリングシュトラセの建築様式を激しく批判した。ロースは新古典派的建築がセメントや漆喰で大理石や御影石を模し、こけおどしの装飾を施していることを嘆き、これに伝統的な職人の素朴な美意識を対置する⁶。ウィーンでは伝統的に、屋根を浮彫で飾るのは貴族に限られ、市民は屋根も外壁も素材をありのままに見せたというが、ロース・ハウスが目指したのは、市民的建築におけるこの職人的伝統を踏襲することであった⁷。同じ文脈において、ロースは分離派、とりわけそこから派生したヨーゼフ・ホフマンのウィーン工房にみられるアーツアンドクラフツ運動を批判する。そこでは近代的な芸術教育をうけ

速水 【書評】 高橋義彦著『カール・クラウスと危機のオーストリア——世紀末・世界大戦・ファシズム』を読む
——世紀転換期ウィーンにおける「批判的モダニズム」——

た自称芸術家が、伝統的な職人領域に越権的に口を出し、その美意識を台無しにしているという理由からである⁸。こうしたロースの議論においては、唯美的モダニズムと一九世紀の新古典派建築が一連のものと捉えられ、そこに進歩よりもむしろ伝統が対置されている。

このように、本書で取り上げられるロースとクラウスに限ってみても、「唯美主義的な文化とは異なる、同時代のウィーンのもう一つの側面、すなわちその『批判的』側面」（26頁）は、著者自身が強調するように、思想的にきわめて多様であり、その輪郭はいまだぼんやりとしたものにとどまっている。守旧派、唯美的モダニズム、批判的モダニズムの関係を思想的に整理し、「批判的ウィーンモダニズム」の思想的輪郭を描き出すためには、文学・美術・音楽・建築・哲学などの諸領域を横断して行われた同時代の様々な論争および対立の詳細を、個別に検討する（著者がクラウスについて行ったような）作業の積み重ねが求められよう。

第三点目は、ナチズムに対抗し得たかもしれない具体的な政治勢力に関する問題、より具体的にはクラウスのドルフス支持に関してである。本書第五章では、国会選挙すなわちデモクラシーを通じてナチスが政権を獲得する現実的な危険が迫っている瞬間に、なおも選挙、国会開催、「真正な、力強い、創造的デモクラシー」の実現を求める社会民主党を、クラウスが批判し、実効的な反ナチス勢力としてドルフスに期待を寄せるに至った経過が描き出される（186頁）。また、同様の理由から社会民主党を批判しドルフスを支持した人物としてフェーゲリンが紹介され、彼が「ドイツと同じように、選挙という民主主義的手続きを通じてナチス勢力がオーストリアで拡大するのを防がねばならない」と考えていたと説明される（190頁）。

ここで思い起こされるのが、ドイツの作家トーマス・マンが、ヒトラーの政権獲得以降、ナチスと戦うためには「啓蒙された独裁」「左翼独裁」以外に道はないと、ある種の権威主義的体制を容認していたことである⁹。

ただしこのようなマンでさえも、ドルフスに対しては、政権誕生当初こそ反ナチス勢力として期待を寄せたが¹⁰、1934年の二月蜂起のニュースに動転し¹¹、社会民主党員に対する弾圧を「狂気」と考え、ドルフス政権を支持する市民層についても「愚か者」であるとコメントしている¹²。二月蜂起の弾圧以降、マンはドルフスを「ヒトラーの露払い」とみなすようになる¹³。

著者が紹介するベンヤミンやカネッティの落胆と憤りからもあきらかなように、クラウスのドルフス支持には致命的な政治感覚の欠如がある。著者はそれについて、クラウスの政治的態度に存在する、議会主義デモクラシーや立憲主義の遵守といった「形式的な政治的権利への意識の低さ」(190頁)を厳しく批判する。「政治的自由にとって最も大切なこと」であるはずの「形式的・制度的な原理原則」(193頁)への軽視が、ファシズムの性格を持つドルフスの支持に繋がってしまったという著者の指摘は、きわめて重要である。

同時に、今一度立ち止まって考えたいのは、「デモクラシーによって」オーストリアにナチス政権が迎え入れられてしまうというクラウスやフェーゲリンの危惧が、現状認識としてどこまで正確であったのかという問いである。オーストリア国民の多くがナチスを支持していたことは、著者が挙げている地方選挙の結果(第五章, 注52)や、99パーセント以上が賛成したという合邦をめぐる国民投票結果(195頁)から、あきらかであるようにもみえる。

ただたとえば、ドイツにおけるナチスの権力掌握過程については、ナチスはデモクラシーによってではなく、むしろデモクラシーの破壊によって政権についたとの見方もできる。1933年の全権委任法の成立には、国民の基本権(集会・出版・言論の自由)停止、共産党・社会民主党議員大半の逮捕拘留、武装したSAによる国会包囲といった、デモクラシーとは相いれない暴力的手段が用いられ、また、ヒトラーが首相に就任する直前に行われた1932年11月の選挙でも、ナチ党は33.1パーセントの議席を獲得

したにすぎなかったからである。デモクラシーの制度を通じて国民の圧倒的な支持を獲得し、合法的に体制を転換したという見方は、むしろナチスの自己理解にすぎなかったともいえよう。

ヒトラーとナチスがデモクラシーの鬼子であるという言説は今日、多数者の意志が個人の権利を抑圧する危険に対して自覚を促し、デモクラシーを強化するための自己批判として機能している。しかしナチスをデモクラシーの帰結とみなす言説は、デモクラシーそれ自体に反対し、「善き権威主義」を求める論理としても用いられかねない。ヒトラーに対抗するためにドルフスを支持したクラウスの思想的軌跡は、その危険を読者に示すようににも思われる。

1 高橋義彦『カール・クラウスと危機のオーストリア——世紀末・世界大戦・ファシズム』慶應義塾大学出版会、2016年。本書より引用する際は、本文中に頁数を括弧に入れて示す。

2 Carl E. Schorske, *Fin-de-siècle Vienna. Politics and Culture*, (New York 1981). [『世紀末ウィーン——政治と文化』安井琢磨訳、岩波書店、1983年]

3 Carl E. Schorske, *Thinking with History: Exploration in the Passage to Modernism*, (New Jersey 1998).

4 たとえば以下を参照。「額に支配の烙印を押された、心身ともに力弱き者としての女性に対する憎悪を説明することは、同時にユダヤ人排斥の理由を説明することになる。女性やユダヤ人たちをみれば、数千年来、彼らが支配者の地位についたことがないのがわかる。彼らは片付けようと思えばそうできたにもかかわらず生きており、その不安と弱さ、多年の圧迫をつうじていっそう大きくなった自然との近しさが、彼らの生の本領となっている。このことが、いつも意識を緊張させて自然から距離をとることで強さを手に入れ、自らに永遠に不安を禁じなければならない強者をして、見境のない怒りへとかりたてるのである。」Max Horkheimer/Theodor W. Adorno, *Dialektik der Aufklärung*, (Frankfurt a. M. 1988), S. 120. [『啓蒙の弁証法——哲学的断想』徳永恂訳、岩波書店、1990年、166-7頁（訳文は一部変更した）]

5 *Ibid.*, S. 218f. [前掲書、311頁]

6 Adolf Loos, *Die Potemkinsche Stadt* (1898), in: *Sämtliche Schriften in zwei Bänden*, Bd. 1, hrsg. von Franz Glück, (Wien/München 1962), S. 153-156. [『ポチョムキン都市』鈴木了二、中谷礼二監修、加藤淳訳、みすず書房、2017年、48-52頁]

7 たとえばロースは次のように述べる。「ここでわれわれは唯一の真実に立ち

返るべきだ。私が常日ごろ口にしてきた伝統という名の真実に。そのむかし先達が建てたように、われわれも建てること。これを習慣にしようではないか。」 Adolf Loos, *Heimatkunst* (1914), in: *Sämtliche Schriften in zwei Bänden*, Bd. 1, S. 340. [「郷土芸術」『にもかかわらず』鈴木了二、中谷礼二監修、加藤淳訳、みすず書房、2015年、152頁]

⁸ Adolf Loos, *Architektur* (1910), in: *Ders, Trotzdem. 1900-1930*, hrsg. von Adolf Opel, (Innsbruck 1931), S. 3. [「建築」『にもかかわらず』98頁]

⁹ Thomas Mann, *Tagebücher 1935-1936*, hrsg. von Peter de Mendelssohn, (Frankfurt a. M. 1978), 13.VIII.1936, S. 351.

¹⁰ Thomas Mann, *Tagebücher 1933-1934*, hrsg. von Peter de Mendelssohn, (Frankfurt a. M. 1977), 23.VI.1933, S. 120f.; *Die Briefe Thomas Manns. Regesten und Register*, Bd.1, hrsg. von Hans Bürgin (Frankfurt a. M. 1977), 33/156, S. 717.

¹¹ Mann, *Tagebücher 1933-1934*, 12.II.1934, S. 322.

¹² *Ibid.*, 13.II.1934, S. 324.

¹³ *Ibid.*, 16.II.1934, S. 327.